寄せ太鼓

北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬
三丁目16番26号(〒807-1261)
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

祇園山笠 近づく

今年の筑前木屋瀬祇園祭が近づきました。令和2年からのコロナウイルス蔓延防止対策を受けて3年間祭りを自粛していましたが、昨年は国のウィズコロナの方針を受けて氏子総代会で祭り再開を決め祭りは大いに賑わいました。5月に祭りの実行委員会が立ち上げられ神事・奉納行事等祭り全般の方針と山笠制作が開始されました。今年の一番山は赤山で当番町は眞名子、二番山は青山で当番町は芝原が務めます。

山笠は須賀神社正面に建つ山笠会館にて有志の皆さんの手により休日や仕事が終わって夜間に制作にされます。人形の題材は各当番町で決定しており今からどんな題材になるのか楽しみです。制作にあたっては「梶棒洗い」「台ならし」「台からげ」等を行い最終の飾り付けを行います。

7月13日の祭り当日を迎えて朝9時の花火を合図に両町は山笠事務所から駆け足で飛び出します。赤山は感田町の興玉神社下、青山は扇天満宮近くの遠賀川で水を汲み、神社でお祓いを受けて会館からの山笠と共に各事務所に持ち帰り山笠巡行の開始です。町内の巡行、夜の神社への山笠奉納、翌日の両町による集団山笠巡行、追い山、宮入へと祭りは進みます。宮入は祭り最後の行事で当番町は山笠を勇壮にそして綺麗に神社に入れるかを競うのです。

祭りを安全円滑に行う為に、両山笠の運行方法やコースの協議する掛け合い、山笠運行時の安全確保や山笠を引く子供達を見守る保護係、通行車両との安全確保を担当する交通係が務め山笠の安全な運航を行います。また、山笠事務所では町内役員が祭り本部との連絡や運行時間に合わせてお茶や水を運びます。賄い担当は山笠帰着時間に合わせて昼食や夕食の準備を開始し祭り参加者の接待を行い、祭りを盛り上げます。

こうした、多くの皆様方の力で祭りは成り立っていますので祇園祭の無事成功に向けて皆様方のご理解とご協力を心からお願い申し上げます。

長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会
広報部会会長　藤　政文

企画展「仏さまに出会う木屋瀬」

現在、みちの郷土史料館では、北九州市在住の絵手紙作家である真武香織と、その生徒の作品展を行っています。

絵葉書を中心に計600点の展示物を出品しており、真武香織の代表作品である「365日仏様の絵手紙」と、真武香織と98名の生徒で、本展のために制作した「木屋瀬の仏さま」の二部構成です。作品数も多く、非常に見応えのある企画展に仕上がりました。

展示は6月23日(土)まで行っていますので、絵手紙や仏様、木屋瀬の寺院についてご興味のある方はぜひ期間中のご来館をお待ちしています。

筑前木屋瀬　第20回 今昔歳事記

紅屋泰助氏(故　柴田泰助氏)の「筑前木屋瀬今昔歳事記の第20回目です。

今回は、「ひろば北九州」平成23年2月号の行事・風物について、前編としてご紹介させていただきます。

・・・

シリーズ

文化の薫る町 木屋瀬

第十一回　みちの郷土史料館　開館

木屋瀬宿の中心にある、みちの郷土史料館は長崎街道木屋瀬宿記念館として、平成13年（２００１年）１月１日に開館しました。

木屋瀬宿巡りをする人、木屋瀬の歴史を調べようとする人、木屋瀬を散策する人が、まず、最初に訪れる場所がこの館です。木屋瀬宿だけでなく長崎街道としての歴史やその関係性も理解でき、又　江戸時代から明治、大正、昭和に至るまでの庶民の道具などが展示され、当時の生活を伺い知ることが出来る貴重な資料が多数展示されているからです。各地の宿場町を見回しても、このような宿場の資料を集め展示しているところは余りありません。住民の強い要望でこの館が出来たことを考えると木屋瀬の住民の高い文化と意識の高さを感じられます。

じつは、この資料館は二代目で初代の郷土資料館を基礎として作られたのです。初代の資料館は、終戦後の殺伐とした世の中で木屋瀬は戦災にもあわず、江戸期の宿場の遺産を今に残していました。そこで、公民館活動の一環として、各家にある古いものや、珍しい物を持ち寄って、我が家の宝物展を何度か開催し大変好評を得ました。その後、出品物を寄付される方や管理が家では出来ないのでお預けします等の事案が続出しました。それと同時に、預かり品や寄贈の管理が大変になり展示館建設の必要性が出てきました。当時、木屋瀬の文化の継承に熱心であった市会議員の岩尾四十三郎氏が奔走して、八幡西区の某小学校の解体した廃材で、木屋瀬郷土資料館を建て資料の保管展示の場所として開館しました。その後も古い家等が解体されると資料館に寄贈を要請したので資料が大変充実しました。品物が多くなるにつれ、設備の不備が目立ち新しい資料館建設の必要性が叫ばれました。又、管理も、献身的にボランティアで梅本和多流氏がなされていましたが、高齢で管理の限界に近かった。その折、木屋瀬の街づくりが始まりました。どのような、街を創りたいかの、住民の意識調査から始め、「木屋瀬の歴史を活かした文化の香る街づくり」の総意を得て、その基本的考え方から街づくりがはじまりました。まさに、みちの郷土史料館の建設は街づくりの基本的考え方と一致して、最初に取り組んだ事業です。場所の選定の第一は昔の本陣の跡地です。しかしそこは、明治以後いろいろと紆余曲折があり、酒蔵から宗教法人の天理教に移り現存していました。その場所を移動して頂き史料館を建設する計画です。無謀なような計画でしたが、思いが実現し２００１年１月１日に、木屋瀬宿の拠点施設として、こやのせ座を付設して完成しました。木屋瀬住民の思いが詰まった夢のような計画でしたが多くの人の努力により実現し今日に至っています。

前 木屋瀬郷土資料館

現 みちの郷土史料館

桜咲く木屋瀬宿のよせ太鼓

本町　野口靖彦

第22回 木屋瀬芸術祭を開催しました！

大型連休期間中の５月３日～５日にて、毎年恒例の行事である「木屋瀬芸術祭」を開催しました。

初日は中学生とプロによる吹奏楽コンサート、二日目は歴史講演会や朗読会、企画展関連イベントである新聞ちぎり絵ワークショップ、三日目は筑前各地の伝承盆踊りを７団体が披露しました。多くの市民や関係者の方々がお越しになり、例年に負けない賑わいとなりましたことを大変喜ばしく思います。

芸術祭は来年以降も続きますので、町の皆様におかれましても引き続きご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

大川で遊んだあのころ

わたしの昔話

この辺のもんは、遠賀川のことを「木屋瀬大川」と呼びよった。木屋瀬の一日は、この大川とともに始まる。朝起きて、川で顔を洗いよると、川上から石炭船が下って来る。

「おいさん、石炭おくれ」子供の声に、船頭は大きな石炭の塊をポーンとほうる。子供はワッと水の中に飛び込んでそれを取りに行く。女たちは、川辺で洗濯やら障子洗いやら。井戸端会議やないで、川端会議やね。

川辺には、投網の名人がおった。川面にキラキラと魚の影が見えると、網を担いだいなせな若者がつま先立って浅瀬を走って行く。シャーっと網を投げると魚はそれこそ一網打尽。子ども心にあこがれとったよ。

昼間はよう泳ぎよった。釣りもしよった。イチョウの木におるケムシの腹ワタを酢につけて糸にする。二メートル位しか取れんのやが、これをテグス（釣り糸）にすると面白いごとよう釣れよった。

夕方になると川下から白い帆を立てて石炭船が帰ってくる。七輪の煙をなびかせて、唄を歌いながら、のんびりと帰ってくる。

わしらは「ごはんぞ」と家のもんが呼びに来るまで遊びよった。

木屋瀬は長崎街道の宿場町として有名やが、わしにとっては大川で過ごした、こまいころのことが忘れられんね。

本町　柴田由美子

「柴田豊廣遺稿集」より

木屋瀬宿記念館運営協議会
第24回総会を開催

4月27日(土)、こやのせ座にて第24回総会を開催しました。

総会では、令和5年度事業報告及び決算報告、令和6年度事業計画案及び予算案について説明があり、原案どおり承認されました。また、役員については今年度も交代がなく、全員が留任いたしました。引き続き宜しくお願い致します。

令和5年度の来館者数は5年ぶりに3万人を超えました。運営協議会におきましては、記念館及び木屋瀬のPRに取り組むとともに、「みちの郷土史料館」での企画展の開催や、「こやのせ座」での文化事業の実施など、予定していた全ての事業を無事実施することができました。広報部会、みちの史料館運営部会及びこやのせ座運営部会のスタッフの皆様をはじめ、ご協力いただいた地域の皆様に心から感謝申し上げます。

今年度も、伝統文化や文化芸術の振興を図るなど、木屋瀬の魅力を市内外に積極的に発信することで、木屋瀬の賑わいづくりに努めてまいります。

皆様の変わらぬご支援ご協力をよろしくお願い致します。

長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会
理事長　山田　靖

収蔵品紹介「回転こたつ」

「安全こたつ」とも呼ばれます。焼いた炭を入れて使用する「こたつ」は、昭和40年頃まで広く普及していた道具です。中でもこの「回転こたつ」は木材で外枠をつくり、その中にある鉄製の容器に炭を入れて使用します。回転こたつにしかない特徴として、この炭を入れる容器がどのような角度、方向へ傾けても水平を保つように作られているため、中の炭がこぼれる心配がないというものがあります。

上から布団をかけて使用するのが一般的であったこたつには、いつも火事の心配が付きまといました。日常で感じる道具の不便さを暮らしの中で生まれた知恵で解消しようとする、人々のひらめきや工夫が伺える道具のひとつです。

長崎街道木屋瀬宿記念館
学芸員　加藤悠